

地獄の一季節 註解(四)

小 田 良 弼

☆

On ne part pas. — Reprenons les chemins d'ici, chargé de mon vice, le vice qui a poussé ses racines de souffrance à mon côté, dès l'âge de raison — qui monte au ciel, me bat, me renverse, me traîne.

出発は見合はせだ。——又、足元の徑を辿り直すとしよう。分別がつく年頃になってこの方、俺の脇腹に苦悩の根を下した悪徳を、——空にも翔り、俺を叩きのめしては引き廻す悪徳を背負って。

On ne part pas: ——

前節において往相面が語られ、思想的予見としては還相面が語られてゐるが、なほ最後には、

Maintenant je suis maudit, j'ai horreur de la patrie. Le meilleur, c'est un sommeil bien ivre, sur la grève.

と書いてゐる。今、本節にはそれを受けて、On ne part pasといふのである。いやいや、だが然し、といった感じであらう。祖国フランスを

恐れる呪はれの身であり、砂浜の上に醉眠を求めぬ身である。しかし思想的予見としては、

Je reviendrai.....J'aurai de l'or: je serai oisif et brutal. Les femmes soignent ces féroces infirmes retour des pays chauds. Je serai mêlé aux affaires politiques. Sauvé.

と書いてゐる様に還相面を語つてゐたのである。そこで On ne part pasといふわけである。

即ち現世否定の彼方に Plage armoricaine の世界、砂浜における醉眠の世界があつたのだが、今それを更に否定してゐるわけである。

Cf. Mauvais Sang, p. 25.

Vais-je être enlevé comme un enfant, pour jouer au paradis dans l'oubli de tout le malheur ?

俺は、あらゆる不幸を忘れて天国に戯れて遊ぶ為に、小児のやうに攫はれてしまふのだらうか。

その他 Bateau ivre (第一部から第二、第三部への変転) など参照。
Reprenons les chemins d'ici, chargé de mon vice: ——

les chemins d'ici は、*やぎて*、否定してそこを去って、*plage armoricaine* へと立ち去った道である。その道を辿り直す (*repreignons*) とは還相の道を辿ることを意味する。したがってこの道は *vice* を、かつては否定してくちを入とした *vice* を背負って辿ることなる。

Cf. Adieu, p. 87.

Et à l'aurore, armés d'une ardente patience, nous entrerons
aux splendides villes.

暁が来たら俺達は、燃え上る忍辱の鎧を着て、光り輝く街々に這入らう。

Cf. Vies, III.

Je suis réellement d'outre-tombe, et pas de commissions.
本当に墓場の向うから来たこの俺だ、何の用事があるものか。
その他、Adieu, p. 86 *やぎ*

Point de cantiques: tenir le pas gagné. Dure nuit! Le sang
séché fume sur ma face, et je n'ai rien derrière moi que cet
horrible arbrisseau!.....

讚美歌はない。ただ手に入れた地歩を守る事だ。辛い夜だ、乾いた血は、俺の面上に烟る、この恐ろしい小さな木の外、俺の背後には何物もなし。.....

Mauvais Sang, P. 13 *やぎ*

D'eux, j'ai: l'idolâtrie et l'amour du sacrilège; — oh! tous les
vices, colère, luxure, — magnifique, la luxure; — surtout
mensonge et paresse.

といつてゐる。

その世界は悪徳、醜怪にみちてゐる。そこから目を離してはならないのだ、そこから足を離してはならないのだ。だから *Nuit de l'Enfer*, p. 37 *やぎ*

Ah! remonter à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités.

Et ce poison, ce baiser mille fois maudit!

あゝ、又、生活へよじ昇るのか、俺達の醜悪さに眼を据ゑるのか。そしてこの毒、この接吻、重ね重ねも呪はしい。

といつてわけである。そこには絶えず乖離の悩みもあらうし、苦悩行をまねがれることばじきなう (Cf. *Nuit de l'Enfer*; *Bottom*; etc.)。しかし、そのことこそ「莫作」の世界を現成するわけである (Cf. *Fêtes de la Patience*, I, *Bannières de Mai*; etc.)。なんじうん、innocence *やぎ*
つへん (後注) *やぎやぎ*、L'Eternité *やぎやぎ*

Là pas d'espérance,
Nul orietur.

Science avec patience,

Le supplice est sûr.

もとより希望があるものか、願ひの条があるものか。

黙って黙って勘忍つて

苦痛なれや覚悟の前。

といつてわけである。

Le vice qui a poussé ses racines de souffrance à mon côté,

dès l'âge de raison : —

その悪徳は *âge de raison* 以来深く人間に根を下した悪徳である。この *raison* は、前述の意味での、科学の出発点としての *raison* である。そこに主客相対の世界、我執の世界、したがってそこから一切の苦悩、悪徳がはじまるわけである。それは「東洋の終焉以来」(Cf. *L'Impossible*, p. 68, — depuis la fin de l'Orient.) のことである、*à mon côté* 「最初の永遠の睿知」(Cf. *L'Impossible*, p. 69, — la sagesse première et éternelle.) は失はれてもるのである。だから、ランボオはこの知性に出發した一切の文化、科学、その典型的世界としての西洋を否定して (Cf. *L'Impossible*, p. 68, — je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré assez tôt que nous sommes à l'Occident.) 東洋の睿知に還らうとしたのである。

しかもこの *raison* こそ、人間をして動物との間に一線を劃する意味での人間たらしめる所以のものである以上、抜き難く深く根を下すわけであり、そこに出發する苦悩もまた抜き難いものであらう。à mon côté といふのは、かかる意味で、人間の最も根深い所といふ意味でいふのである。

Cf. *Le Dormeur du Val*.

Il a deux trous rouges au côté droit.

彼は……右の脇腹に赤い穴を二つもあけて。

なほ、知性について *Soleil et Chair*; *Les Assis*; *L'Homme juste*; *Démocratie*; *Solde*; *L'Impossible* 等参照の事。

なほ、この箇所に関連の深い、上掲 *L'Impossible*, p. 68 のところ

を引用してみよう。

M'étant retrouvé deux sous de raison, — ça passe vite! —
je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré
assez tôt que nous sommes à l'Occident. Les marais occidentaux!
Non que je croie la lumière altérée, la forme exténuée, le
mouvement égaré……Bon! voici que mon esprit veut absolument
se charger de tous les développements cruels qu'a subis l'esprit
depuis la fin de l'Orient……Il en veut, mon esprit!

鏗然同然の分別が又戻って来て、——何、ちよっとの間だ。——
俺の数々の不安は、俺達は西洋に居るのだと早く悟らなかつた事に
由来する、と俺は気が付く。西洋の沼々よ。俺はその変性した光を、
衰弱した形式を、錯乱した運動を信ずるのではないが、……さうだ、
今、俺の心は、東洋の終焉の方、人間精神が蒙って来たありとある
残虐な発展をあます処なく引き受けよう。……俺の心がそれを欲
するのだ。

—— qui monte au ciel, me bat, me renverse, me traîne: —
c'est là que j'ai
qui monte au ciel が問題となる。ランボオにおいて
は ciel あるいは azur は寂靜の世界、現世否定の彼方に見出される寂
靜の世界を意味してゐる。

Cf. *Mauvais Sang*, p. 28.

Si Dieu m'accordait le calme céleste, aérien, la prière, —
comme les anciens saints.

『神』が苦し上天の、天空の平穩を、祈りを、与へてくれたなら、

「与へてくれたらしてよ」——古代の聖賢に与へた様に。

Cf. Nuit de l'Enfer, p. 35.

l'enfer est certainement *en bas*, — et le ciel en haut.

地獄はまろしへ下にあふ——そして天は頭上に。

Cf. Matin, p. 80.

Le chant des cieux: la marche des peuples! Esclaves, ne maudissons pas la vie.

天上の歌、人々の歩み。奴隸共よ、この世を呪ふまゝ。

Cf. Génie.

Il ne s'en ira pas, il ne redescendra pas d'un ciel,……

彼は何処にも立ち去りはしまし、空から下りても来まじ、……

Cf. Enfance.

Je serais bien l'enfant abandonné sur la jetée partie à la haute mer, le petit valet suivant l'allée dont le front touche le ciel.

本当に、俺は、沖合に遙かに延びた突堤の上に棄てられた少年かも知れぬ。行く手は空にうち続く道を辿って行く小僧かも知れぬ。

うづれも現世、enfer と対立した彼岸の寂靜の世界である（その他に

Bateau ivre, 6^e 参照）。

ところが、ランボオにおいては、この ciel、寂靜の世界は彼岸の彼方に抽象的に、觀念的に存在する世界ではなかつた。彼の anti-christianisme も、一つにはかかる単なる彼岸の世界としての抽象性に対するものであつたと考へられるのである。この ciel 寂靜の世界は、此岸の世

界を媒介としてのみ現成するものであつた。だから上掲 Matin, p. 80 にあつて ne maudisson pas la vie と云ふわけである。同じく上掲

Génie にあつて

O monde! et le chant clair des malheurs nouveaux!

おゝ、世界よ、新しい不幸の清澄な歌声よ。

といつてゐるのは、かかる此岸即彼岸、彼岸即此岸の意味であつてゐるのである。その他、Fêtes de la Patience, I, Bannières de Mai;

Bateau ivre など参照のこと。

この場合 qui monte au ciel とつてゐるのを、上記の意味であつてゐるのび、ciel が単なる抽象的彼岸の世界として存在するものではない、現世の悪徳を媒介としてのみ現成するものであることをいつてゐるのである。

ところが、悪徳は依然として悪徳であり、その限りにあつて苦惱行はまぬがれなう。かくつ qui……me bat, me renverse, me traîne など云わけである。このことばは Nuit de l'Enfer, p. 33 の

Les entrailles me brûlent. La violence du venin tord mes membres, me rend difforme, me terrasse. Je meurs de soif, j'étouffe, je ne puis crier. C'est l'enfer, l'éternelle peine!

臟腑は焼けつく。劇毒に四肢は振れ、形相は変り、俺は地上をのた打った。死にさうに喉は乾く、息はつまる、声も出ない。地獄だ、永劫の責苦だ。を思はせるものがある。

La dernière innocence et la dernière timidité. C'est dit. Ne pas porter au monde mes dégoûts et mes trahisons.

Allons ! La marche, le fardeau, le désert, l'ennui et la colère.
ぎりぎりの清浄無垢「イノサンス」と窮極の臆病。その通り。数々の俺の嫌厭と叛逆とをこの世に齎らしても始まらない。「この世を嫌ふまい、またこの世にそむきもするまい。」

さあ。前進、荷物〔重荷〕、沙漠、倦怠、憤怒。

La dernière innocence et la dernière timidité. C'est dit : —

イノサンスはランボオにおいて極めて重要な概念であり、ここに詳細に論ずることは不可能であるので、別稿を待つこととして、今はごく簡単にそのあらましかけを述べるに止めたい。なほ *innocence* は訳語をつけることをさけて、今は原語のまま、イノサンスとしておきたい。

ランボオにおいては主客の二元対立、相対の世界、そこに出発する知性分別、これに基づく一切の文化の否定行にはじまり、その否定の彼方に空なる寂靜の世界、死の世界、*bleu blanc* の世界を見出した。と同時にそこに *ennui* が出づきだしたのである。

Cf. Après le Déluge.

——*Sourds, étang*. ——*Écume, roule sur le pont et par-dessus les bois* ; ——*draps noirs et orgues*, ——*éclair et tonnerre*, ——*montez et roulez* ; ——*Faux et tristesses, montez et relevez les Déluges*.

Car depuis qu'ils se sont dissipés, — oh les pierres précieuses

s'enfouissant, et les fleurs ouvertes ! — c'est un ennui !

池よ、湧き上れ、——橋の上にも森の上にも泡立ち、逆巻け。
——黒い敷布よ、大オルガンよ、——稲妻よ雷よ、——さあ盛り上って、逆巻き流れろ、——水よ、悲しみよ、又、『大洪水』を盛り上げてくれ。

といふのも、洪水が引いて了ってからは、——あゝ、埋もれた寶石、ひらいた花、——これはもう退屈といふものだ。

しかし、往相即還相として、今ここに悪徳を背負って歩まうとするのである。*bleu blanc* の世界が単なる抽象的彼岸の世界のものでないとするれば、それは此岸の世界を媒介としてのみ現成するものである。そこにかく悪徳を背負って歩まうとする還相行が語られる理由があるわけである。しかし悪徳は依然として悪徳であり、悪徳が悪徳でなくなるのではない。しかしまた、悪徳は単なる悪徳でなくて、悪徳は即涅槃でもある。ここにランボオのいふ『新しい不幸の清澄なる歌声』(*le chant clair des malheurs nouveaux*. —— Cf. *Génie*) が上るわけである。不幸に居て不幸に居ず、悪徳に居て悪徳に居ない『莫作』の世界がひらかれてくるのである。イノサンスはこの莫作の世界に出てきたものである。したがって、かかる莫作の世界に出てきたイノサンスは単なる *vieilles retraites* (Cf. *Barbare*) ではなく、*un grand illustre retraite* (Cf. *Vies*) といふべき性質のものである。

かかる還相行においては、悪徳を背負って歩むものであり、*le monde* に足を据えようとするものである故に、これを冷静に客観視するところに *farce* である、*parade* であることとが兼ねがれなかったのである (Cf.

Mauvais Sang, p. 28; Parade; Bottom; etc.)。どこに、かかる還相行には
un gros ours aux gencives violettes et au poil de chagrin, les
yeux aux cristaux et aux argents des consoles.

華草子の玻璃と白銀の器物に眼を据ゑて、身は苦悩の白髪に覆は
れ、紫の齒齦を出した一匹の巨きな熊

といつてゐる様な苦悩行をまぬがれることはできなかったのである (Cf.
Bottom et Nuit de l'Enfer, etc.)。

しかしまた悪徳は即涅槃であり、悪徳に居て悪徳に居ず、そこに「清
澄なる歌声」、いひかへてみるならば一切の存在の根拠としての最も根
源的なる世界から発する「うぶ声」としての声も発せられるわけである。
この「うぶ声」としての「清澄なる歌声」においては *ennui* も苦悩行
も姿を消すわけである。そこに生々潑刺とした軽やかな流転の世界、自
然法爾の世界が展開せられるわけである。これがイノサンスの世界であ
ったのである。だから *Fêtes de la Patience, I, Bannières de Mai* に
あらず

Qu'on patiente et qu'on s'ennuie

C'est trop simple. Fi de mes peines.

Je veux que l'éété dramatique

Me lie à son char de fortune.

Que par toi beaucoup, ô Nature,

— Ah moins seul et moins nul! — je meure.

Au lieu que les Bergers, c'est drôle,

Meurent à peu près par le monde.

やれ忍耐だの退屈 [倦怠] だのと、
苦もない話ぢやないか! 「他愛がなさすぎる!」……チェッ、苦勞
とよ。 [「こんな苦しみはばかばかしい。」]

ドラマチックな夏こそは「ドラマチックな夏が」
『運』の車にこの俺を、縛ってくれるこそよろしい。 [縛ってくれ
るやうに。]

自然よ、おまへの手にかかり、
——ちつとはまじに賑やかに、死にたいものだ!

ところで羊飼さへが、大方は
浮世の苦勞で死ぬるとは、可笑しなこつた。

といふわけである。Nature の世界であり、任運の世界である。かく
てこそ正しく

Je n'ai point fait le mal. Les jours vont m'être légers, Je
repentir me sera épargné. Je n'aurai pas eu les tourments de
l'âme presque morte au bien, où remonte la lumière sévère
comme les cierges funéraires. (Cf. Mauvais Sang, p. 25.)

俺は悪を少しも冒してゐなかつた。その日その日は爽やかに過ぎ
て行き、先き先き後悔する事もなからう。善に於いて殆ど死んだや
うになつてゐる俺の魂、葬ひの蠟燭のやうに厳しい光が浮き上る俺
の魂に、悩みはなかつたのであらう。

ともいひ得たわけであり、かかるイノサンスの世界こそ、前後際断的
に一時一時の一事一事が即絶対である故に、l'Eternité にあらず

Puisque de vous seules,

Braises de satin,
Le Devoir s'exhale

Sans qu'on dise : enfin.

繻子の肌した深紅の燠よ、

それぞのおまくと焼えておれあ、

義務はずむところのものだ

やれやれといらふ馳もなぐ。〔遂に、といふことはなした。〕

といふわけであり、かくこそ O Saisons, ô Châteaux の世界が真に開かれてきたのである。

O saisons, ô châteaux,

Quelle âme est sans défauts ?

O saisons, ô châteaux,

J'ai fait la magique étude

Du Bonheur, que nul n'étude.

O vive lui, chaque fois

Que chante son coq gaulois.

Mais je n'aurai plus d'envie,

Il s'est chargé de ma vie,

Ce Charmel il prit âme et corps,
Et dispersa tous efforts.

Que comprendre à ma parole?

Il fait qu'elle fuie et vole !

O saisons, ô châteaux.

季節トキが流れる、〔お、季節よ、〕城塞オシロが見える、〔お、城塞よ、〕

無疵な魂など何処にあらう？

季節トキが流れる、〔お、季節よ、〕城塞オシロが見える、〔お、城塞よ、〕

私の手がけた幸福の、〔一切を包む「幸福」の
秘法を誰が脱れ得よう。不可思議を明めたのだ。〕

ゴールの鶏が鳴くたびに

「幸福」こそは万歳だ。

もはや何にも希ふまい、

私はそいつで一杯だ。

身も魂も恍惚トロロけては〔この「魅力」、身も魂もない〕

努力もへちまもあるものか。「然も、努めるといふことは一切ない。」

私が何を言ってるのかって？

言葉などはふっ飛びしまへだ！

季節トキが流れる、「おゝ、季節よ、」 城塞オシロが見える！ 「おゝ、城塞シロよ！」

この O Saisons, ô Châteaux は一時一時の一事一事が即絶対であり、神の世界であり、今、際会してゐる季節が、眼前の城が即絶対であり、神の世界である、絶対の世界、神の世界はこの身心を、感覺的世界を媒介としてのみ現成する、この汚濁の世界は即涅槃である、といふ意味を歌った詩であらう。この季節が、城が即絶対であり、神の世界であるところにイノサンスがあるわけである。

しかしまた、このイノサンスも、一度展開すれば、ennui や苦悩行は永遠にまぬがれ得るといふ様なものではなく、常にこの両者が、いはばなひ合はせになつて交互に展開されることは、また、まぬがれ得ないものである。

Cf. Nuit de l'Enfer, p. 37.

Ah! remonter à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités.

Et ce poison, ce baiser mille fois maudit! Ma faiblesse, la cruauté du monde! Mon Dieu, pitié, cachez-moi, je ne tiens trop mal! — Je suis caché et je ne le suis pas.

あゝ、又、生活へ攀ぢ昇るのか。俺達の醜悪々に眼を握るのか。

そしてこの毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世の残酷キヤクさ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿カクレひ給へ、俺には、うまく立タつてゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

かくてこの還相行において la dernière timidité とはいはねばならなかつた理由があるわけである。すぐこのあとでも la vie dure, l'abrutissement simple と、その両面をあげてゐる。

Ne pas porter au monde mes dégoûts et mes trahisons: — 悪徳を背負つて歩まうとする還相行である。そこに innocence と timidité とが出てくるのである。そのイノサンスは悪徳を背負つて此岸の世界に、一歩一歩に、一事一事に、絶対の、永遠の現成を行ずる世界であつたのである。したがつて本来その一事一事の性質内容は問はないはずのものである。如何なる一事一事といへども、前後際断的に、その一事一事を媒介として絶対、神の現成を行すべきである。そこにこそ真に「一切是」といはれ、また道元のいふ様に「嫌ふ底の法なし」といはれる世界がひらかれてくるのである。正に O saisons, ô châteaux であつて、今、眼前に眼にふれる世界、耳にふれる世界が即絶対であり、永遠であり、神の世界であるわけである。しかる Quelle âme est sans défauts? とあつて、その一事一事は、dégoûts と trahisons を起ちやる底の事柄でもあり得るだらう。しかしその一事一事が即絶対であり、永遠であり、神の世界であるならば、如何なる事柄とすべし「嫌ふ底の法なし」とある。かくて Mauvais Sang, p. 22 へ

《Faiblesse ou force: te voilà, c'est la force. Tu ne sais ni

où tu vas, ni pourquoi tu vas, entre partout, réponds à tout.
On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.》

『弱気にしろ、強気にしろだ、貴様がさうしてゐる、それが貴様の力ぢやないか。貴様は何処に行くのか知りはしない、何故行くのかも知りはしない、何処へでも到る所に入つて行け、何にでも返答をしろ。貴様が仮に屍体であつたとしたら、それ以上殺さうとする奴もあるまい。』

と云ふわけである。死にながら生きる世界である。Genie に對しては、しぎの様にゐる。

Il ne s'en ira pas, il ne redescendra pas d'un ciel, il n'accomplira pas la rédemption des colères de femmes et des gaités des hommes et de tout ce péché: car c'est fait, lui étant, et étant aimé.

彼は何処にも立ち去りはしまし、空から下りても来まい、女共の憤怒と男共の上機嫌とこの罪業全部との、贖ひを遂げようともしまし。何故なら、彼が存在して、愛されてゐる限り、もう出来てゐるのだから。

本邦、Enfance, IV に於ちのしぎの言葉は、この場所との連関におしつ注田ちんきひまひい。

Je suis le saint en prière sur la terrasse,……

Je suis le savant au fauteuil sombre,……

Je suis le piéton de la grand'route par les bois nains;……

Je serais bien l'enfant abandonné sur la jetée à la haute mer,

le petit valet suivant l'allée dont le front touche le ciel.

俺は、岡の上に、祈りをあげる聖者、……

俺は陰鬱な脇掛椅子に靠れる学究。……

俺は、矮小な森を貫く街道の歩行者。……

本当に、俺は、沖合に遙かに延びた突堤の上に棄てられた少年かも知れぬ。行く手は空にうち続く道を迎つて行く小僧かも知れぬ。

じつにランボオの世界が簡単に語り示されてゐる。ne pas porter au monde mes dégoûts et mes trahisons と云ふところは、この Enfance に對して、自らを piéton と稱してゐるところに照応するものがあり、修道者としての一面を語るものと見てもよい。

Allons! La marche, le fardeau, le désert, l'ennui et la colère:——かくて悪徳を背負つて還相の道を歩むわけである。しかしその道は担々たる道ではない。苦惱行とのなひ合はせの道である。そこで fardeau を感ずるわけであり、désert を見るわけである。また還相の道への門出に當つて、なほ ennui と colère とを感ずるのも当然のことと云ふ。それらをまつた la dernière innocence, la dernière timidité をめやつたの門出である。その点をみれば p. 27 のじつと対称的であり、興味をかうものがあふ。

Cf. Mauvais Sang, p. 27.

L'ennui n'est plus mon amour. Les rages, les débauches, la folie,—— dont je sais tous les élans et les désastres,—— tout mon fardeau est déposé. Appréciations sans vertige l'étendue de mon innocence.

倦怠はもはや俺の愛する処でない。忿怒と放蕩と愚行、——俺はその躍動も災禍も全て知つてゐる、——あらゆる俺の重荷は下された。俺の無垢潔白〔イノサンス〕の領域を、心を据ゑて批判してみよう。

ennui が姿を消し、イノサンスが姿を現すことでは、*fardeau* はすっかり下されてをり、同 p. 28 で

moi, ma vie n'est pas assez pesante, elle s'envole et flotte
loin au-dessus de l'action, ce cher point du monde.

処が俺の生活は十分目方が掛らない。世界の重点〔この世の大切な点である〕、行動〔たつき〕といふものの遙か上層に飛び去り、淡つてゐるのだ。

といつてゐる様に、*fardeau* を下した軽さがあるのに対して、今、ここでは門出の重荷があるのである。

**A qui me louer ? Quelle bête faut-il adorer ? Quelle sainte
image attaque-t-on ? Quels cœurs briserai-je ? Quel mensonge
dois-je tenir ? — Dans quel sang marcher ?**

一体俺が誰に自慢しようといふのか。どんな動物を崇めなければならぬのか。どんな聖像を攻撃しようといふのか。どんな心を砕かうといふのか。どんな嘘をつかなければならぬのか。〔どんな嘘をついてはならないのか。〕さてはどんな血に塗れて歩くのか。

A qui me louer ? : —

今、*la dernière innocence, la dernière timidité* へ向つての還相行の門出に當つて、この道を、この世界を一体誰に向つて自慢することがあるのか、そんなことももはや必要はあるまい。いはば門出の言葉である。完全なる自己放棄 *abnégation* に生れるイノサンスであり、*abrutissement simple* の世界であり、そこには *vieillesse* もなく *danger* もない、永遠の無畏の世界がひらかれてくるはずである。かかる世界は語ることもできず、又語ることを要しない世界であり、一歩一歩に行ずべき行為の世界である。そこにはまたランボオの *solitude atroce* が感じられる。

Quelle bête faut-il adorer : —

この *bête* はもちろん、ランボオが羨んだ *la félicité des bêtes* (Cf. *Délires*, II, p. 55.) における *bête* である。 *bête* に至福の世界を見、羨んだのであるが、この還相行においてはもはや羨むことすらないのである。何を嫌ふといふこともないと同様に、何を羨むといふこともない境地がそこにひらかれるはずである。かつては羨んだ *bête* の世界すらも羨むことがないわけである。

Cf. O Saisons, ô Châteaux.

Mais je n'aurai plus d'envie,

Il s'est chargé de ma vie,

もはや何にも希ふまい、

私はそいつで一杯だ。

その他、Fêtes de la Patience: Chanson de la plus haute Tour;
L'Eternité; Fêtes de la Faim. 参照のこゝ。

Quelle sainte image attaque-t-on. —

この sainte image は直接にはキリスト教における sainte image を指すのであらう。如何なる聖像を攻撃しようといふのか、そんなことをする必要もあらうとの意味でいふ言葉だが、Mauvais Sang, p. 25 の Les blancs débarquent. Le canon! Il faut se soumettre au baptême, s'habiller, travailler.

J'ai reçu au cœur le coup de la grâce. Ah! je ne l'avais pas prévu!

白人どもが上陸する。宗教儀典。洗礼を受け、著物を著て、働かねばならない。

俺は聖籠の一撃を心臓に受けてゐた。あゝ、それを俺は予知してゐなかつたのだ。

といつてあるところは、還相行におけるこの境地を裏書きしてゐるところへよう。いはばイノサンスにおける「莫作」の境地であり、sainte image の絶対肯定の立場を語る言葉と考へてよぶであらう。sainte image に居て居ないのである。そしてこれをまた、ランボオは、farce, parade と見てゐる様である(後述参照)。

Quels cœurs briserai-je? : —

cœurs は思想、考へ方の意味で使つてゐる言葉であらう。今、この還相行においてはどんな cœurs を打破せねばならないのか、絶対肯定的還相行においてはその必要を認めないわけである。

Quel mensonge dois-je tenir? : —

この mensonge は絶対肯定的にランボオの世界につつまれた men-

地獄の 一季節 註解・

songe であり、完全な自己放棄 abnégation における mensonge の肯定である。Mauvais Sang, p. 13 の

D'eux, j'ai: l'idolâtrie et l'amour du sacrilège; — oh! tous les vices, colère, luxure, — magnifique, la luxure; — surtout mensonge et paresse.

に於ける mensonge である。そしてこのことが、先述の様に、ランボオに於ける farce や parade であつた様である。

Dans quel sang marcher? : —

悪徳を背負つて、mauvais sang を背負つての還相行である。どんな血に塗れて進むことだらうか。どんな血に塗れてもよいではないか。

一と二との、有と無との交互媒介を語ると考へられる Mouvement に於ける

Car de la causerie parmi les appareils, le sang, les fleurs, le

feu, les bijoux,

Des comptes agités à ce bord fuyard,

— On voit, roulant comme une digue au-delà de la route hydraulique motrice,

Monstrueux, s'éclairant sans fin, — leur stock d'études;

Fux chassés dans l'extase harmonique,

Et l'héroïsme de la découverte.

何故ならば、種々な装置や、血や、花や、火や、宝石の間の談笑から、この敗走する船の上の興奮した計算から、

—— 恰も、水力発電の水路の彼方の堤防のやうに轟きながら、

怪物のやうに、限りなく輝きながら、——彼等の研究の蓄積を眺めてゐるのだ。

調和のある恍惚の中に追ひ込まれた彼等と、

発見のヒロイズム。

と語つてゐる。

Plutôt, se garder de la justice. — La vie dure, l'abrutissement simple, — soulever, le poing desséché, le couvercle du cercueil, s'asseoir, s'étouffer. Ainsi point de vieillesse, ni de dangers : la terreur n'est pas française.

むしろ、正義にとりつかれまいと用心する事だ。——辛い命、単純な愚鈍、——萎びた拳で、棺桶の蓋を揚げ、腰を下して、息が絶えるのだ。かうすれば老衰もなく、危険もない。恐怖はフランス趣味でなく。

Plutôt, se garder de la justice: ——

上米の A qui me louer? 以下 Dans quel sang marcher? まじの言葉をうつひつ plutôt とさなむむむむむ。かへつ la vie dure, l'abrutissement simple とさな言葉かいつて出つくるのである。それが la dernière innocence et la dernière timidité の世界の有り様だからである。かかる世界は justice を超えた世界である。

justice のひらひら Matinée d'Ivresse, L'Homme juste 等参照のこと。今 L'Homme juste の一部だけを引用してあかう。

Socrates et Jésus, saints et justes, dégoût!

Respectez le Maudit suprême aux nuits sanglantes.

ソクラテスにイエス様、聖者に正義派、汚らはしや!

血潮にまみれた夜な夜なの呪はれた人間こそ敬ぶがいい!

La vie dure, l'abrutissement simple: ——

かへつ la dernière innocence et la dernière timidité とさつてる様に、この還相行に於つては、それは l'abrutissement simple の世界である。また la vie dure をまぬがれ得ないわけである。それはこの両者のなひ合はせである。無心の安楽行と苦惱行とのなひ合はせである。

Cf. Nuit de l'Enfer, p. 37.

Ah! remonter à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités. Et ce poison, ce baiser mille fois maudit! Ma faiblesse, la cruauté du monde! Mon Dieu, pitié, cachez-moi, je me tiens trop mal! — Je suis caché et je ne le suis pas.

あゝ、又、生活へ攀ぢ昇るのか。俺達の醜悪さに眼を据ゑるのか。そしてこの毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱や、この世の残酷や。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺にはうまく立つてゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

悪徳を背負つて la vie dure に還る還相行においてはかかる苦惱行はまぬがれなるといふであり、 la vie dure とさな所以である(その他 Bottom, Angoisse 等参照)。

と同時にこの la vie の中にあつて je suis caché とさつてゐる様に、

解脱、救ひがあるのである。さうに Mauvais Sang, p. 23 や

je suis de la race qui chantait dans le supplice; je ne comprends pas les lois; je n'ai pas le sens moral, je suis une brute:.....

俺はもともと……刑罰を受けながら歌を歌つてゐた人種だ。法律などは解りはしない。道德的意識も持つてゐない。俺は一個の禽獣なのだ。「生れた儘の人間なのだ。」

と云つてゐる様な面が出てくるのである。l'abrutissement simple と云ふ所以である。そこに上げられる歌声とは前述の le chant clair des malheurs nouveaux である。いはばこの汚濁の身心を媒介として、上げられる絶対、神の声である。そこに清浄なる人間の、「いはば「うぶ声」をきくのである。かかる声は純一無雜であり、他愛もない単純なものである。l'abrutissement simple と云ふ所以である。

Cf. Guerre.

C'est aussi simple qu'une phrase musicale.

音楽の一楽節の様に均もなり。

soulever, le poing desséché, le couvercle du cercueil, s'asseoir, s'étouffer. Ainsi point de vieillesse, ni de dangers: la terreur n'est pas française:—

それはいはば死にながら生きる姿である。否定を媒介とする還相行の生は、いはば死にながら生きることであり、何等のはからひのない任運の前後際断行である。

Cf. Mauvais Sang, p. 22.

地獄の一季節 註解

Faiblesse ou force: te voilà, c'est la force. Tu ne sais ni où tu vas, ni pourquoi tu vas, entre partout, réponds à tout. On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.

弱気にしろ、強気にしろだ、貴様がさうしてゐる、それが貴様の力ぢやないか。貴様は何処に行くのか知りはしない、何故行くのかも知りはしない、何処へでも到る所に入つて行け、何にでも返答をしろ。貴様が仮りに屍体であつたとしたら、それ以上に殺さうとする奴もあるまい。

Cf. Les Sœurs de Charité.

Alors, et toujours beau, sans dégoût du cercueil,
Qu'il croie aux vastes fins, Rêves ou Promenades
Immenses, à travers les nuits de Vérité,

かくてなほ、常に穩かに、茫漠たる最後の日の、
棺を厭ふ気配もなく、真理の夜を幾つも横切つて、
はつしなく迎ふ夢想や逍遙、

そこにこそ真に無畏の世界がひらかれるのである。ni de dangers と云ふ所以である。

Cf. Mauvais Sang, p. 25.

Je n'ai point fait le mal. Les jours vont m'être légers, le repentir me sera épargné. Je n'aurai pas eu les tourments de l'âme presque morte au bien, où remonte la lumière sévère comme les cierges funéraires.

俺は悪を少しも冒してゐなかつた。その日その日は爽やかに過ぎ

て行き、先き先き後悔する事もなからう。善に於いて殆ど死んだやうになつてゐる俺の魂、葬ひの蠟燭のやうに蔽しい光が浮き上る俺の魂に、悩みはなかつたのであらう。

無畏の世界は前後際断行なるが故に、かかる悔いごとこのない、軽やかな世界でもある。またこの世界は永遠 Eternité である故に、point de vieillesse と云ふ所以である。

Cf. Chanson de la plus haute Tour; L'Eternité; Âge d'Or.

うじじい Âge d'Or の一節だけをあげておかう。

O ! joli château !

Que ta vie est claire !

De quel Age es-tu,

Nature princière

De notre grand frère ? etc.....

とても美しや！ 城の影！

お前の生命は輝けり！

ああ、いつくしき大自然

我が大いなる兄弟よ

お前の齢、ひはいくばくぞう。 e t c.....

—— Ah ! je suis tellement délaissé que j'offre à n'importe quelle divine image des élans vers la perfection.

—— あゝ、全く俺は寄る辺もない身だから、完成への燃え上る想ひを、もうどんな聖像に献げても構はない。

往相即還相としてのこの還相行には、完成への燃え上る様な想ひがあった。 Jeunesse, IV y'

Des êtres parfaits, imprévus, s'offriront à tes expériences. 予見を許さぬ、完璧な諸存在が、お前の様々な経験に、献げられるだらう。

とらいつをり、また Génie と云ふやう

Il est l'amour, mesure parfaite et réinventée, raison merveilleuse et imprévue, et l'éternité :

彼こそは、再創始された完全な尺度たる、予見を許さぬ驚く可き理智たる愛であり、また、永遠である。

といつてゐる様に、ランボオの世界は当然、perfection の世界でもあつたのである。ランボオの一步一步はこの perfection くの élans とあつたわけである。もちろん、それは固定的完成の世界ではなく、一步一步に前後際断的に perfection を行ずる底の世界である。だから L'Eternité において、

Elle est retrouvée.

Quoi ? —— L'Eternité.

.....

Puisque de vous seules,

Braises de satin,

Le Devoir s'exhale

Sans qu'on dise : enfin.

また見付かった。

何がだ？ 永遠。

……………

繻子の肌した深紅の燠よ、

それそのおまへと燃えてゐれば、

義務はすむといふものだ

やれやれ「遂に」といふ暇もなく。「(ことごとくに)。」

といふわけである。その都度その都度 perfection への des éans があ
るわけである。しかも今、この還相行においては、この相對の惡徳を背
負った汚濁の世界を媒介として、絶對、神、永遠の現成が行ぜられるわ
けであり、そこにはもはや「嫌ふ底の法」はない。ne pas porter au
monde mes dégoûts et mes trahisons (p. 20.) といひ、entre partout,
réponds à tout (p. 22.) といふわけである。だから、Quelle sainte
image attaque-on ? といふてゐる様に、この perfection への des éans
は如何なる divine image にも今や献げ得るわけだ。いはば方法即法で
ある。馬祖の言葉に「著衣喫飯、言談祇對、六根運用、一切施為尽是法
性」とあり、道元も「法性にあらざらんと言談祇對運用施為する、これ
法性なるべきなり」といっている。そしてこれはまた、当然、無所住の
境地でもある。一切の執着を捨離した、一切の自我を放棄した、一所に
も滞ることのない、いはゆる無所住の世界である。それは完全に孤立の
世界にうちすてられた世界でもあるわけである、délaisse' といふ所以で
ある。またいぎに O mon abnégation といふ所以でもある。

O mon abnégation, ô ma charité merveilleuse ! ici-bas, pour-
tant !

De profundis Domine. suis-je bête !

お、俺の自己放棄、お、俺の不可思議な慈愛、だがそれも、この
世のこと。

主よ、奈落の底より、寔に俺は阿呆だ。

O mon abnégation : —

前述の如くに還相行における、方法即法、一切施為尽是法性なりとい
はれる世界は完全なる自己放棄の世界である。自己が放棄せられないか
ぎり、自他の對立相對を脱することはできず、したがって当然、絶對、
神の現成を行することは所詮不可能となる。したがってまた当然、そこ
には方法即法、一切施為尽是法性なりといふ様な世界の現成しようはず
もなし。自己の立つところ、停滞、執着、煩惱はまぬががたい。

Cf. Mémoire.

ô canot immobile ! oh ! bras trop courts ! ni l'une

ni l'autre fleur : ni la jaune qui m'importune,

là ; ni la bleue, amie à l'eau couleur de cendre.

……………

Mon canot, toujours fixe ; et sa chaîne tirée

Au fond de cet œil d'eau sans bords, — à quelle boue ?

お、動かぬ丸木舟よ！短かすぎる僕の腕よ！

どの花も摘むことが出来ない。心にかかる黄色い花も、

灰色の水によく相^{ツサ}応ふ青い花も。

……………

丸木舟はいつもつながれてゐる、その鎖をば

ひろびろとしたこの流れの眼の底に曳きずって、——どんなに泥深
いかしら？

自己の立つところに、かかる嘆きはまぬがれがたいのである。自我の鎖をひきずってゐるから *a quelle boue?* の嘆きが出るのである。この自我の鎖を絶ったところに、舵も失せ、錨も失せて (Cf. *Bateau ivre: — dispersant gouvernail et grappin*)、波のまにまに、雲のまにまに流れ行く、行雲流水の透脱の世界が現成するのである。それは完全なる自己放棄、自ら棹さすこともなく、舵をとり錨を下すこともない世界において可能なのである。

Cf. *Comédie de la Soif*, 5, Conclusion.

Mais fondre où fond ce nuage sans guide,

……………

よし、当所ない浮雲の、とろける処でとろけよう。

……………

かかる完全なる自己放棄の世界はまた無求の世界であり (Cf. *Fêtes de la Faim*)、したがってまた無一物の世界であり (Cf. *Le Loup criait sous les Feuilles*)、それは死にながら生きて行く世界である (前掲参照)。そこにあるがままの世界における安住が可能になり、*Luxes oisifs* の世界も展開せられ、莫作の世界も展開せられてくるわけである (Cf. *Fêtes de la Patience*, I, *Bannières de Mai*)。それが前述の様にイノサミン

の世界でもあったわけである。

ô ma charité merveilleuse! ici-bas, pourtant! : —

完全に自己を放棄したところに、したがって自他の対立、一切の対立を超えたところに、且つ万法即法、一切施為尽是法性とする還相行におうランボオの *charité, charité merveilleuse* が出づくるのである。ランボオはかつては、*Les Sœurs de Charité* にあひる様に *Mort* に *sœur de charité* を見たのであるが、かかる *Charité* は *Une Saison en Enfer*, p. 8 じ

La charité est cette clef. — Cette inspiration prouve que j'ai rêvé!

慈愛がその鍵だ。——こんな考が閃いたのは、たしかに俺が夢を見てゐた証拠だ。

と云つてゐる様に、還相行の世界を開く鍵とはならなかつたのである。

だから *Adieu*, p. 85 において

Suis-je trompé? la charité serait-elle sœur de la mort, pour moi?

俺は騙されてゐるのだろうか。俺にとって、慈愛とは死の姉妹であらうか。

と云ふわけである。還相行におけるランボオの *Charité, Charité merveilleuse* はひつひつ「死の友」(*les amis de la mort. — Adieu, p. 86*) としての *Charité* ではなかつたのである。それは *Génie* や

O lui et nous! l'orgueil plus bienveillant que les charités perdues.

お、彼と俺達、失はれた数々の慈愛よりも、遙かに好意のある
倨傲さだ。

といてゐる様に、「死の友」「死の姉妹」としての Charité よりも、は
るかに慈愛にみちた「倨傲さ」なのである。それがランボオの Charité,
Charité merveilleuse であつたのである。それが倨傲といはれる所以は、
還相面における Charité であるところにもある。だから、ici-bas, pour-
tant! といふわけである。

ここに生れたランボオの愛 amour は Matinée d'ivresse や
On nous a promis d'enterrer dans l'ombre l'arbre du bien et
du mal, de déporter les honnêtetés tyranniques, afin que nous
amenions notre très pur amour.

俺達の最も純粹な愛を醸し出す為に、善悪の樹を暗闇の中に埋葬
し、暴君的な誠実を流刑に処する事を、俺達は約束されたのだ。

といふ様に、もちろん、善悪、正義を超えた至純の愛であり、A une
Raison や

Ta tête se détourne: le nouvel amour! Ta tête se retourne,

—— le nouvel amour!

お前が頭を廻らせば、新しい愛だ。頭を復せば、——新しい愛だ。
といてゐる様に、頭を廻らし、さらに頭を復したところ（還相面）に
出てくる此岸の愛である。この地上の愛である。

De profundis Domine, suis-je bête!——

De profundis Domine は Vulg. Psalm, CXXX, 1 参照。De profundis
とは即ち下界よりの意、天なる Dominus に対していふ言葉であり、前
の ici-bas, pourtant をうけていふのである。そこには「俺は下界に住
む人間だ、しかも下界に安住の世界を見出した人間だ」とのニュアンス
がふくまれてゐる。

suis-je bête とは、やはり天なる Dominus に対して、俺は下界の
bête だ、その bête にこそ félicité があるのだとの意でいふ言葉であ
る。この bête もいふ迄もなく、ランボオがかって羨んだ bête の世界
であり、今、還相の門出に當つて Quelle bête faut-il adorer? とさつ
た、その bête である。【未完】